



THE HIROSAKI UNIVERSITY LIBRARY BULLETIN

弘前大学附属図書館報 No.36 2012.11

目次

巻頭言 アナログへの郷愁	1
特集 第8回『言語力』大賞コンテスト	3
本との出会いを楽しむ<第10回>	7
図書館に関する話題<第10回>	8
Library News	9
図書館グループ紹介	10
本学教員等著作寄贈図書・資料一覧	11

アナログへの郷愁

学長 佐藤 敬



私は、学生時代に図書館をほとんど利用しませんでした。言い訳すると、当時の医学部分館には自習室がなく、閲覧室も十分でなかったと思います。医学科5年生になって、先輩や同級生との勉強会を始め、そのためにNew England Journal of Medicine 最新号のClinico-pathological Conference欄をコピーしたのが、ほぼ唯一の利用でした。因みに、この勉強会は本当に勉強になり、教員になった後も、いくつかの学生グループと一緒に同じ勉強会を続けましたが、皆が「役にたった」と言ってくれました。

医学部を卒業し、大学院生として研究を始めた昭和50年当時は、インターネットはなく、当初は、単に参考文献を孫引きで探す場所が図書館でした。しかし、自分の研究論文が最初に印刷公表された時、掲載号を図書館で目にした思い出は忘れられません。研究論文が印刷公表される頃には、その内容自体は自分の中で繰り返し反芻し、過去のものになっていますが、実際に論文が掲載された時の喜びは名状し難い独特の経験でした。私にとっ

ての図書館は、至福の思い出の場でもあります。

そのような感激も回を重ねると特別ではなくりましたが、しばらくの間、図書館は学術誌の最新号で研究情報をチェックする場でした。毎週土曜日に、関連分野の主要な学術誌の、先ずは論文タイトルを読み、興味あるものはじっくり読むことを習慣にしていた、至福ではないにしても、十分楽しめる作業でした。

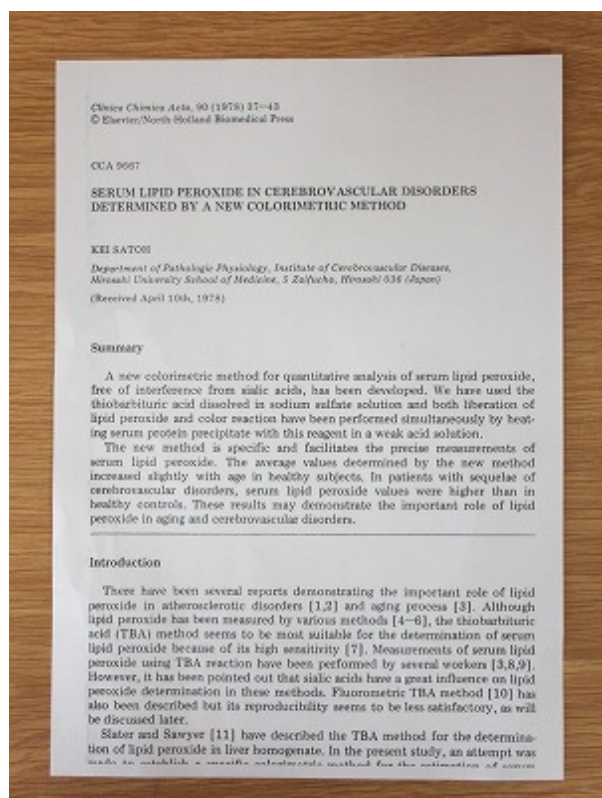
その後はデジタル時代に入り、学術論文もオンラインで読めるようになって、情報としての価値が大いに高まったことは間違いありません。しかし、アナログからデジタルへの変遷を経験した者として、大げさに言えば、以前の図書館への郷愁もあります。

そんな中で、最近、立て続けに外国から2件の別刷り請求があり、いずれも、私が約40数年前に公表した学位論文の別刷りをメールで請求してきたものでした。当時200部用意した別刷りは既になく、最後に残った1冊をスキャンして添付ファイルで返送しました。公表後40年たった論文を

いまだに参考にしてくれる研究者が世界に居ることに喜びを感じるとともに、もう途絶えてしまった別刷り請求の習慣を懐かしく思い出すことになりました。

私が駆け出しの頃は、研究者同士で論文の別刷りを請求するのが一般的で、多くは国外から葉書での請求でした。時には、世界的権威からの請求が届き、大いに感激することもありました。また、送られて来る葉書や切手にはお国柄が現れていて、概して当時の東側諸国からは低品質の葉書で多数の請求が来ました。

1990年代になってから、「この論文の別刷りはありません」という但し書きが付されている論文が出始め、別刷り代や郵送代の節約のためだったのでしょう。そして、徐々にオンラインでの検索が普通になり、少なくとも私の論文の別刷り請求は途絶えました。恐らく今回は、私の学位論文が既にオンラインで見られないほど古いためだと思います。



学長が公表した学位論文の1ページ目

Clinica Chimica Acta 90 (1978) 37-43

「Serum lipid peroxide in cerebrovascular disorders determined by a new colorimetric method」

別刷りが請求されることは、研究者としてのささやかな喜びだったと、郷愁のようなものを感じています。時には、私の論文を参考文献として引用した論文の別刷りがお返しに送られて来こともあり、そんな時には、自分の論文にも幾ばくかの価値を感じ、また研究に勤しむ意欲を再確認できるのでした。今でも、論文が引用されることがあれば基本は同じで、時に“Citation Alert”なるメールが送られてきます。したがって、この郷愁はアナログに対するものなのでしょう。当時は、一日に数回、研究室の郵便箱をのぞくのが楽しみで、外国からの葉書があると、少しだけ“研究に勤しむ意欲を再確認”できるのでした。“Citation Alert”を無味乾燥に思うのは、単にアナログ世代の傾向に過ぎないと言えば、その通りなのかもしれません。

いずれにしても、本学からの研究論文が引用される回数は、大学ランキングの重要な指標です。それは、参考文献として引用されることが、研究の世界にそれなりのインパクトを与えることであり、研究者の務めとも言えるからです。私自身は、たまにしか来ない“Citation Alert”を楽しみに、研究者としての引退生活を過ごすことになりました。

私にとっての図書館は、研究生活の中で大きく変わってきましたが、学生諸君にとっては、重要な勉学の間です。今の図書館はデジタル時代にも対応しています。自分のことを棚に上げ、学生諸君には図書館を大いに利用して下さいよう願っています。

(さとう けい)